

堀の鷗

泉鏡花作

大正八年三月

最近の旅行の話ですか。出掛けるには出掛けました。つい此の一月の十五日から大阪へ行つて十日ならず居ましたが、旅行の印象なんてそんな煩かしいものは、お土産同然に生憎何にもありませんよ。旅行とは申すもの、大阪の会社に勤めて居る水上さんが、逢ひに來い、逢ひに來い、と言ふから逢ひに行つた、とたゞみ掛けると、喧嘩のやうに聞えますがね、實際旅行と言ふよりは、水上さんと、もう一人、神戸電機の梶原可吉さんと言ふ、みんないゝ中同士に逢ひに行つたんですから、お互に顔さへ見て居りや可いので、大阪に居るうちも澤山見物にも出掛けないで、下宿、と言ふと水上さんが怒ります、土佐堀濱側の高等御旅館照月と言ふの、二階座敷の八畳、水上さんの部屋の鄰室が明いて居たので、其處へ陣取つたものです。憚りながら絨毯が敷いてあつて水上さんの方には敷いてないのだから、親しき

中にも禮儀ありで立派なお客です。此の座敷が土佐堀に向つて居て、お天氣都合はよし、いゝ心持でしたよ。のどかな水に幾羽も鷗が飛んで居ましてね。飛んでるかと思ふと、ふは／＼と浮いて、すつと一ならびに成つて泳ぐ。見て居るうちに花びらのやうに散つて亂れて遊びます。其の中を船が艫を使ひ權をさして、行つたり來たり、日中餘り閑ですから鷗の數をよむと二十三羽すら／＼一列びに泳いで居た事があります。何故然う閑だと言ふと、瀧さんが御存じの通り勤めに謹嚴な人ですから、前夜、何處かで二時三時まで一所に騒いで飲んで居ても、あくる日は時間を缺かさず、九時までには背廣を一着してきちんと出勤をしますので。可吉の可さんも、同じく會社へ出るんでせう。一人が行つて來ます、一人が行、では一寸、と言ふと二階を下りるのを、夜具の中から宿酔の顔を出して少々極りの悪さうに見送る圖と言ふものは、友だちは承知だから可いやうなもの、御婦人方には何うして／＼、なか／＼以てお目に掛けられた圖ではありません、と言ふもので。御兩人が午後四時ひけて歸るまでは、置炬燵で鷗のお對手、其の日の長さつたらありません。それぢや

あ些と見ぶつにでも出ればよかりさうなものです
ね、寒し、億劫たし、それに二人が探切で、方角の
分らない、ぼんやりしたおのぼりが、名にしおふ浪
花の津の賑ひだから駈違ふ電車や自動車に怪我でも
しやしないかと案じてくれますし、濱寄の娘はんた
ちに岡惚でもされはしまいかと何、飛でもない、が、
慾目ですな、内々妬いてもくれまから、おとなし
く炬燵へ取つて置きのいろに成つて居るのです。然
る處此のいろ始末の悪い事は、留守事に、おまんや
はんで煎茶だとしをらしいけれど、もうお晝と言ふ
と手酌で熱燗を傾けるんです。沖の鷗とか何とかい
氣持、秋刀魚は目黒ぢやアありませんが鷗は土佐堀
に限ります。一寸御注意までに申しますが、大阪見
物の方が南地をお心掛けなさいますと、此の鷗は見
られませんかよ、道頓堀には居ないんですから。さて
明石鯛、木の葉鰈、伊勢蝦、比目魚、鴨、繪で見て
もうまいやうな御馳走澤山。贅澤な事は土佐堀を漕
ぐ小舟に、阪方の葛西の小父さんと云ふ様子なのが、
葱、蕪、水菜の青々としたのを積んでるのを視て、
あ、うまさうだ、あれが食べたいと思へば、晩の膳
に切込鍋、一名すいしや鍋と成つて顯はれる。申す

までもなく三國一で酒はよし、肴はよし・・・・
と言ふと、婦人は、と言はねばなりませんのすけ
れども、鷗ほど心易いのはないのですから、これは
批評の限りでなし。第一可吉さんは、神戸に家があ
るのに、おなじ旅館へ泊込みで、七八日の間に水も
洩らさない奥方に一度顔を見せたつ切と言ふのにつ
けても、そんな贅澤が言へますか。それから何か寫
眞をと云ふお望みですが繪端書さへ買つて歸りませ
んから、大阪の景色つたつて何もありません。

申譯に其處へお目に懸けましたのは、それは御存
じの奈良のです、が、餘りツイ通り過ぎますか知ら、
しかし其の鹿は、今日は、と云ふと一寸挨拶をする。
其の、今日は、が婦人だと、餘計に恚う角を曲げて
細い首で容子をするんださうです。洒落たものです、
其のおつもりで御覽下さい。（寫眞略）それも私が
参つたのではないので、同行の案内が見物をさして
貰つて來たのです、案内者は南地伊丹幸のお香代は
んと言ふのと、艶の家と言ふ席のとうはん、即ち娘
と二人で、いやゝ女と言ふものは、何時何處でどん
な知己を拵へるか油斷のならない、其の二人が自動

車で飛ばして来て、さあをいでやす、で連出したん
ですがね、怪しからん事は、是非、と言つて私を誘
ひません。ですから参りません。尤も昨年奈良は見
て来たので、否、二月堂の繪馬堂で雁もどきの煮込
を食つて、瓶詰を飲んで来たので、歸つて雪岱さん
に叱られまゝたつけ。二月堂まで行つて、あの國寶
が一杯の三月堂を何故見ないつてーですから其を
見ておいで、ついでに煮込を食べておいで、と出し
て遣つて、此方は炬燵を半分出て、當日は、水菜と
湯葉と、焼麩を一所に鴨を煮て、手酌でうつとりと
成つて、照月の娘さん十四五に成るのが、七ツの歳
から稽古をすると云ふ義太夫のお温習の統治の、下
屋から水に傳ふのを聞きながら、時々何うだい鴨的
なんで、微酔で欄干越に呼ぶもんだから、鴨のやつ
笑つて居やあがる。上つて来ないかつて言ふもんだ
から、向う河岸へ逃げれば寒し、おのぼりを御覽よ
何かで、羽で突き合つて弱つて居る。それを對手に、
一人が、唯今と襖を覗く、一人が、やあ、と其處を
あける、藝子はんにもないやつな、容子のいゝ二人
の歸るのを待つて居ました。．．．えゝ奈良行
の女連の方は待たなかつたかつて、聞くんですか御

尤つとです、まつたく肝かん心しんな事ことです。御ご尤もつとです。が、笑わら
つて・・・不こたへず答こたへず・・・其そ處こはお察さつしください。
それとも土と佐さ堀ぼりのかもめ鷗かもめにお聞ききなさいますか。